

J.LEAGUE NEWS

Official News Letter

vol. **109**

15.Nov.2004



編集・発行
社団法人日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

Amazing, J.

スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想



© J.LEAGUE PHOTOS

2004 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ FC東京が初の優勝 PK戦を4-2で制す

2004Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝は11月3日、東京・国立競技場に5万3236人の大観衆を集めて行われ、FC東京が浦和レッズを破り初優勝を飾った。

決勝にふさわしく白熱した試合は、延長戦を含む120分間を終えても0-0。大会史上4度目のPK戦となった勝負は、F東京が4-2と制し、浦和の連覇を阻んだ。F東京にとってはJリーグでの初タイトルとなり、優勝賞金1億円、Jリーグカップ、ヤマザキナビスコカップを贈呈された。また、MVP賞はF東京のGK土肥洋一、前日の前夜祭で発表されたニューヒーロー賞は浦和のMF長谷部誠が受賞した。

CONTENTS

2004Jリーグヤマザキナビスコカップ FC東京が初の優勝……………1~3
攻守のバランス取れ、浦和レッズが独走 J1終盤戦……………4
USスポーツビズ2004……………5
TOPICS 2005年シーズンから優勝賞金は2億円 J1リーグ戦/「電動車椅子サッカー選手権大会」を後援/ジェフユナイテッド市原の新チームロゴ承認/GM講

座を開催/マネジメントセミナー開催/育成指導者セミナー開催/フィジカルコンディショニングセミナー開催/広報研修会開催/「FLAGS TOWN 2005年春夏新商品展示受注会」開催/新潟県中越地震による代替試合開催および義援金送付/岡田正義氏J1主審通算200試合達成……………6~7
ロブ・バーン氏によるGM講座……………8

J.League Official Sponsors

Calbee

Canon

SUNTORY

JOMO

Nicos

LAWSON

KONAMI

Network Partner

NTT東日本 / NTT西日本

League Cup Sponsor

ヤマザキナビスコ

Jリーグ百年構想
パートナー
朝日新聞

J 2004 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ



©J.LEAGUE PHOTOS

浦和レッズは昨年、見事に初優勝を成し遂げJリーグで初めてタイトル獲得の感激に酔ったが、今年は逆に、初優勝を狙うFC東京の挑戦を受ける立場となった。

この決勝を前に、浦和はJリーグの2ndステージで2位に勝点7差をつけ、首位を快走していた。得点ランキング首位のエメルソン、昨年のJリーグヤマザキナビスコカップでMVP賞、ニューヒーロー賞をダブル受賞した田中達也を中心とする攻撃陣が絶好調。田中マルクス闘莉王が軸となる守備陣も最少失点を誇り、リーグの初優勝を視野に捉えていた。

一方、その浦和にリーグ戦、ナビスコカップを合わせ、通算6勝2分け2敗という成績を残していたのがF東京。今季の2ndステージで浦和に唯一、勝っているのも彼らだった(第6節、1-0)。浦和戦後、リーグでは5試合、勝利から見放されていたが、1999年のJリーグ参入以来の初タイトルに向けて闘志を燃やしていた。

スタンドを埋めた青のF東京、赤の浦和という両サポーターが大声援を送る中、試合はF東京のキックオフで始まった。ともにスピードとテクニックに優れた選手を前線に配するため、ボールをもった選手を厳しいチェック、複数による囲い込みによって、その出足を封じようとした。

試合展開に大きな影響を及ぼす事態が生まれたのは29分。エメルソンを倒したF東京のDFジャンが、早くも2度目の警告を受け、退場処分となったのだ。守備のかなめ、そしてキャプテンを欠くことになったF東京の原博実監督は、ボランチの三浦文丈をべ



©J.LEAGUE PHOTOS

胴上げされる原監督

ランチに下げ、投入したDF藤山竜仁をジャンのポジションに据えた。攻撃の選手をピッチに残したのは、「前のだれかを削れば、レッズが(さらに前へ)出てくる」(原監督)という判断に基づいたものだ。

FC東京 原 博実監督

最高の舞台がそろった。浦和のよさを消すより、われわれの持っているものをすべてぶつけようと言って試合に臨んだ。あまりにも早い時間の退場だったが、そこから最後まであきらめないチームカラーがよく出て、粘り強くやれた。PK戦では、ここまでやってくれば、もう勝敗はどうなっても選手に感謝したいと思っていた。タイトルがこんなにうれしいものとは思わなかった。多くの人が喜んでくれ、選手たちも喜んでいる。

浦和レッズ プッフバルト監督

難しい試合の入り方をしてしまった。決勝ということで選手がナーバスになってしまい、F東京もいいプレスをかけてきた。数多くのいいチャンスがあったが、今日はゴールに入らなかった。F東京は一生懸命に守りながらシュートのチャンスをねらっていたと思う。120分の間にチャンスがありながらゴールできなかったことが今日のすべて。F東京には、心よりおめでとうと申し上げたい。

鈴木昌 Jリーグチェアマンの話

両チームの健闘で、決勝らしいすばらしい試合になった。両チームのサポーターの雰囲気もすばらしく、Jリーグの原点を見た試合だったと思う。優勝したFC東京は最後まで全員の守備の意識が高かった。守備の勝利といえよう。

しかし、後半に入ると浦和は「(F東京の)4バックをサイドに寄せるため」(ブッフバルト監督)に、FW永井雄一郎をサイドに開かせた。これが功を奏し、サイド攻撃から次々と決定機を生む。前半に5本だったシュートは、後半に9本と増え、0-0のまま迎えた延長戦の30分間には13本を放った(F東京は合計8本)。

F東京は「最後まであきらめないというチームカラー」(原監督)を発揮し、DF茂庭照幸の冷静な対応、FW戸田光洋のゴールカバー、そしてMVP賞を獲得する土肥の好セーブなどによって浦和の猛攻をしのいだ。90分が終了する直前、浦和の田中達のヘディングシュートは、ポストをたたいた。

PK戦に委ねられた勝負は、「意地でも1本は止めようと思った」という守護神、土肥の気迫が実り、最後はDF加地亮が落ち着いて決めF



© J.LEAGUE PHOTOS

東京が4-2の勝利。クラブ史上最高といえるタイトル獲得の喜びを、サポーターとともにした。

選手時代は、浦和の前身である三菱重工のエースストライカーとして日本サッカーリーグで活躍し、1998年から1999年まで浦和の監督も務めたF東京の原監督は「優勝はいい。また、優勝したい」と感激に浸っていたがこの決戦のポイントを「接戦にもち込むこと」に置いていたという。それは、浦和が接戦をあまり経験しておらず、前半を0-0で折り返せば、普段は(前に)出てこない山田暢久や長谷部誠が出てきて、すぎが生まれるだろうという読みからだった。

もちろん、試合の4分の3余りを少ない人数で戦うというハンディは、予想外だったろうが、そのピンチを「チームが一丸となって戦うこと」(土肥)で乗り切った。そして、この勝利のもつ意義について原監督は「ワンランク強くなるための自信になると思う。これまでは惜しいところで届かなかったから」と、今後の飛躍につながる重要なス

トップと認識したようだ。

これに対してブッフバルト監督は「(試合に)難しい入り方をしてしまった」と立ち上がりの出来を悔やんだが、リーグ戦への影響については「決定機をつくれなかったのなら問題だろうが、6~7回のいいチャンスはあった。うちはいいFWばかりなので、次は決めてくれるでしょう」と、シヨックの色はなかった。MF鈴木啓太も「自信をなくす必要はない」と、新たな、もう一つの大きな目標へ気持ちを切り替えていた。



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

ニューヒーロー賞 長谷部 誠選手

歴代の受賞選手をみても、素晴らしい賞だと思うので、明日はこの賞に恥じないプレーをしたい。



© J.LEAGUE PHOTOS

MVP 土肥洋一選手

1人減ったが、それで逆にひとつになれた気がした。昨年の天皇杯ではPKをあまり止められずに監督に怒られた。PK戦になった時には、今日では意地でも止めようと思っていた。

『ナビスコキッズイレブン22名が国立に集結!』

Jリーグは、「2004 Jリーグヤマザキナビスコカップ」予選リーグから準決勝まで、小学生以下の子供たちを対象にしたスペシャルイベント「ナビスコキッズイレブン ~クラブといっしょにコクリツを目指す!!」を開催した。準決勝までの54試合の参加者合計は、1万4282人。決勝の国立競技場に招待された、FC東京、浦和レッズのキッズイレブン22名が、シュートゲームとドリブルゲームで対戦する『ナビスコキッズバトル』で対戦した。夢の国立の芝生に足を踏み入れた子供たちは元気にピッチの上を走り回り、試合前のスタジアムには大きな歓声が上がった。



© J.LEAGUE PHOTOS

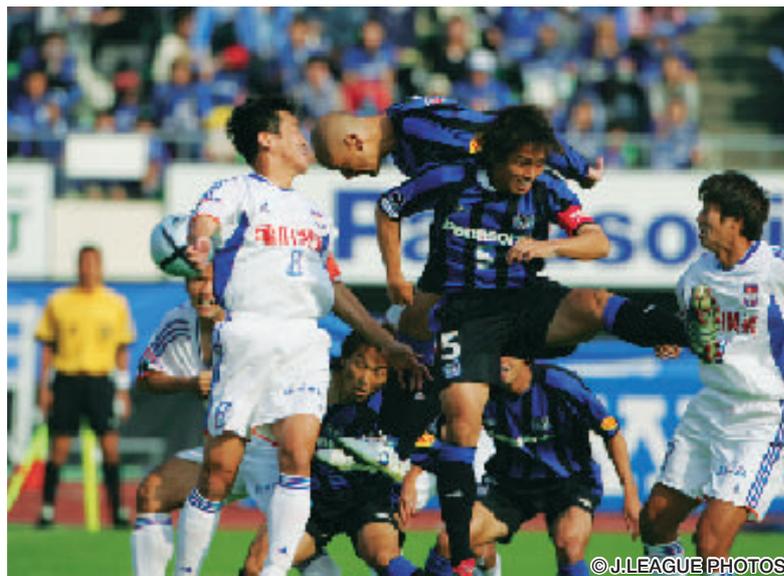
『ガチャピン・ムックがやってきた! サッカーサイズfor KIDS』開催

予選リーグから決勝戦までの数会場で、子供たちを対象にした「ナビスコカップにガチャピン・ムックがやってくる! サッカーサイズ for KIDS」を開催した。キックオフ前のスタジアムで、サッカーの基本的な動きを取り入れた準備体操「サッカーサイズ」を子供たちに楽しんでもらうことを目的とし、大会中継局のフジテレビとのコラボレーションの一環として予選リーグから実施した。フジテレビの人気番組「ポンキッキーズ21」の人気キャラクター、ガチャピンとムックそしてMr.ピッチも参加し、試合前のスタジアムを盛り上げた。



© J.LEAGUE PHOTOS

攻守のバランス取れ、浦和レッズが独走 J1 終盤戦



Jリーグディビジョン1(J1)の2ndステージは浦和レッズが独走。初のステージ優勝に向けて飛ばしている。

1stステージは、昨季両ステージ制覇を成し遂げた横浜F・マリノスが混戦を抜け出して3ステージ連続のタイトルを手にした。横浜FMは選手層も厚く、岡田武史監督の好い配りで2ndステージも優勝に一番近い存在と思われていた。ところが、開幕から故障者が続出し、思うような試合運びができなかった。そんな中、今季大幅に選手を補強し、選手たちの気力も充実してきた浦和が、快調に開幕5連勝と白星を重ねトップに立ち、ジュビロ磐田や鹿島アントラーズなどの不振にも助けられて、その差を広げてきた。

浦和の特徴といえば、まずはエメルソン、田中達也の俊足ツートップの攻撃力。2人の精神的な成長もあって、個人技に走らずお互いを生かすような絶妙の動き、パスワークを発揮している。目下リーグ2位の34得点(第12

節終了時点)をマークしている。さらに見逃せないのが、安定した守備陣。田中マルクス闘莉王を軸にネネ、アルバイが巧みに機能し合い、GKの負担を大幅に軽減している。第12節終了時点で13失点はリーグ最少。まさに攻守のバランスが取れている上に、両サイドの永井雄一郎、三都主アレサンドロの力も攻撃に彩りを加えている。

この浦和を追うのがジェフユナイテッド市原とガンバ大阪だが、ここぞというときの決め手に欠ける。特に市原は取りこぼしが目立ち、G大阪は大黒の活躍こそあるものの、勝ちきれない。共に、優勝経験のなさが勝負どころで出てしまっている。2004Jリーグヤマザキナビスコカップで初優勝したFC東京も試合に

よって好不調が気になってしまう。むしろ攻撃陣を増強したアルビレックス新潟の健闘ぶりがたたえられよう。

反対に、柏レイソル、セレッソ大阪は歯車がかみ合わない。柏は得点力不足、C大阪は守備陣が機能せず、J2との入れ替え戦も覚悟しなければならない状況だ。

一方、J2は川崎フロンターレが第36節に早々とJ1昇格条件の2位以内を決め、第37節には優勝を果たした。大宮アルディージャは終盤に来て10連勝(第41節終了時)で、自動昇格をほぼ確定した。注目はJ1との入れ替え戦に出場する3位チームの争いで、モンテディオ山形、アビスパ福岡などの試合は最後まで目が離せない。

USスポーツビズ2004

Jリーグ 企画部 佐野毅彦

第5回

強いチームづくり ～選手とフロント、2つの人材育成～

アメリカのスポーツビジネス界では2つの強いチーム、「プロスポーツ選手で構成されるチーム」と「フロントオフィス」が求められる。強いチームづくりの責任を負うのは、ゼネラルマネジャー(GM)あるいはプレジデントである。

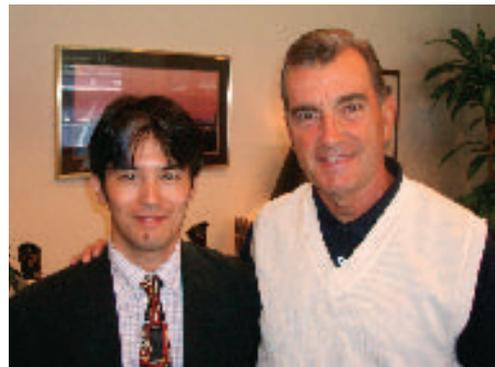
MLB(メジャーリーグベースボール)のアトランタ・ブレーブスは1991年から2003年まで12年連続で地区優勝を果たし(1994年はストライキのため途中でキャンセル)、ワールドシリーズ優勝1回、ナショナル・リーグ優勝5回を誇る。この常勝チームをつくり上げたGMのシュホルツ氏はその秘密をこう明かす。「強いチームをつくるためのキーワードは人である。優秀な人材を見出し、育て、やる気を起こさせ、律し、あたたかく見守る。そして、優秀な人材を責任あるポスト(ポジション)に置く」。

MLBのGMの役割は、サッカーでいうところのテクニカル・ディレクターに近い。しかし、シュホルツ氏のやり方は、フロントオフィスづくりにも適用できる。

MLBと異なり、MLS(メジャーリーグサッカー)でのGM職は社長職に近い。強いフロントオフィスづくりはGMの責任である。「重要なのは、核となる優秀な人材を集めること。それぞれのポジションに、その職域でGMよりも能力の高い人材を置くことが成功への鍵である。例えば、チケット販売担当者はGMよりもセールス能力に長けた人材であるべき」。ロサンゼルス・ギャラクシーのGM、ハミルトン氏はこう説明する。強いチームは優れた人から成る。しかし、優れた人を集めただけでは強いチームはつくれな。明確なゴール(あるいはミッション)を掲げること。それを皆に理解させること。目標達成のために皆が全力を尽くすような文化を浸透させること。シュホルツ氏とハミルトン氏は共通してGMの役割をこんなふうに説明する。MBA(経営学修士号)の授業でも使えそうである。

では、優秀な人材をどこから集めればよいのか。「素質ある選手をメジャーへ絶え間なく送り続けるパイプライン、ブレーブスが保持するような選手育成プログラムの構築は、メジャーレベルで勝ち続けるために最も重要である」。シュホルツ氏は優秀な人材を育てるための環境整備を強調する。

メジャーのフロントオフィスに送り込む人材を育てる仕組みは、スポーツ選手育成のそれとは少し異なる。どのリーグにもマネジメント系人材育成プログラムなど存在しない。産業界全体に人材育成の仕組みが組み込まれているのである。大学や大学院にはスポーツ経営学のプログラムが用意されている。多くがマイナーリーグのインターンからキャリアをスタートさせ、経験を積みながらメジャーへの階段を昇る。ここで生き残るために必要な資質は、ハミルトン



筆者とシュホルツ氏(アトランタ・ブレーブスGM)

氏のことばを借りればこうである。「必要とされるのは、自分の業務に情熱をもって取り組めること。サッカーへの情熱ではない」。

第6回(最終回)

ファンへの投資活動 ～CRM～

アメリカのNBA(プロバスケットボールリーグ)事務局にSWATチームと呼ばれる集団が存在する。特殊機動部隊のことではない。各チームのマーケティング活動の活性化を支援するために生まれたマーケティングの専門家部隊である。

SWATチームの発案者で現在もSWATチームで活躍するフロリダセントラル大学のサットン教授は、SWATチームの役割を次のように説明する。「チームに対してマーケティング上の指導を行う必要はない。チームは既に十分な知識と経験を持っている。チーム間で情報を共有させ、各チームが自ら解決策を導き出せるようサポートすること。これがSWATチームの役割である」。

NBAは放送権料だけでも年間、何億ドル(つまり何百億円)も稼ぎ出す。しかし、経営の軸足はアリーナにあることを認識し、1枚でも多くのチケットを売るためにSWATチームが設立された。チケット販売から始まり、今ではスポンサーシップ、ファンロイヤルティ、CRM(Customer Relationship Management)へと、SWATチームが手がける領域は広がっている。

「いま重要視しているのは、シーズンチケット保有者の更新率を80%から90%へ引き上げること。計算上、顧客が入れ替わるサイクルが5年から10年へ伸びることになる。シーズンチケット保有者は、お金、時間、感情の3つをチームに投資している。だから、チームには更新率を維持し高めるために、少しばかりファンに投

資するよう勧めている。でも、ファンへの投資を単なる販売経費と捉える経営者は多い。経費と捉えれば、目先の都合ですぐに削減の対象となる」。

数年前、CRMというコトバがNBAを席卷した。顧客の購入・利用履歴、苦情や意見といったあらゆる情報を集めて統合管理し、顧客維持率を高めて長期的な収益向上を目的とする、航空会社やクレジットカード会社ではおなじみの経営手法である。「CRMは両刃の剣。絶大な効果を上げることもあるし、莫大(ばくだい)な費用を無駄にすることもある」。NBAエンターテインメントのディレクター、ケイ氏は反省気味にこう説明する。「CRMは必要。でも、明確な目的を持って、初めから幾つも結果を求めようとせず、シンプルにスタートすることはもっと大事。5年の歳月と莫大な費用をかけてNBAはこれを学んだ」。

NBAは絶えず研究する組織である。現在注目しているのはカジノだという。「カジノに行く人は、何百、何千ドルと失っても皆ハッピーな気持ちで家に帰る。そこで過ごした時間が楽しいからだ。お金をすつても笑顔で戻ってくる。とんでもなくすごいビジネスだ」。サットン教授はその理由をこう説明する。

勝っても負けても、またスタジアムやアリーナに戻ってきてもらうことは、チームの経営上極めて重要である。

2005年シーズンから 優勝賞金は2億円 J1リーグ戦

Jリーグは10月19日に開催した理事会で、2005年シーズンからのJ1の1シーズン制移行に伴い、賞金を以下の通り設定した。

	2005年	2004年 (各ステージ)	2004年 (チャンピオンシップ)
優勝	200,000,000円	100,000,000円	優勝：20,000,000円
2位	100,000,000円	50,000,000円	準優勝：10,000,000円
3位	80,000,000円	40,000,000円	—
4位	60,000,000円	30,000,000円	—
5位	40,000,000円	20,000,000円	—
6位	20,000,000円	10,000,000円	—
7位	10,000,000円	—	—

「第10回電動車椅子サッカー 選手権大会」を後援

Jリーグは、日本電動車椅子サッカー協会が主催する「第10回電動車椅子サッカー選手権大会」を後援した。

同大会は、身体障害者の競技としての電動車椅子サッカーの普及振興を図ることを目的に10月30、31日、名古屋市で開催された。

ジェフユナイテッド市原の 新チームロゴ承認

10月19日の理事会で、ジェフユナイテッド市原の新チームロゴが報告された。ホームタウンを広域化し、市原市と千葉市がホームタウンとなったことに伴い、市原、千葉の地域名を併記した。なお、新ロゴは2005年2月1日から使用される。

Jリーグ・ゼネラルマネジャー (GM)講座を開催

Jリーグは10月25、26日の両日、JFAハウスほかでゼネラルマネジャー講座を開催した。ロブ・バーン氏をはじめ5氏が講演した。J1、J2の23クラブから24名と、オブザーバーとしてJ2へ入会申請している3クラブ（ザスパ草津、愛媛FC、徳島ヴォルティス）が参加した。

○間野義之
(早稲田大学助教授)

「スポーツ政策・法規」

スポーツ事業を行うに当たり押さえておくべき法令、行政機関のスポーツ政策の背景と潮流について。

○小笹芳央
(株式会社リンクアンドモチベーション代表

取締役社長)

「モチベーションマネジメント」

クラブを経営する上で踏まえておくべき視点や、モチベーション高くコミュニケーションする方法、考え方を習得するための体感型ゲームを交えた研修プログラム。

○山下則之

(Jリーグアカデミー・プロジェクトリーダー)

「Jリーグアカデミー」

Jリーグアカデミーの設立経緯と現在までの活動内容。

○ロブ・バーン

(アルジャジーラ・スポーツ&カルチャー・クラブ[アラブ首長国連邦]・テクニカルディレクター)

「オランダのクラブ経営と選手育成」

フェイエノールト(オランダ)のテクニカル・ディレクターをはじめとする40年近いキャリアを基に、クラブ経営と選手育成に関して。

○小竹伸幸

(Jリーグ理事)

「選手契約・移籍制度」

ボスマン判決を契機として、選手の移籍等に関するFIFAルールが大きく変わった。制度趣旨を含め、旧ルールと新ルールの解説。

JEF UNITED
ICHIHARA CHIBA

マネジメントセミナー 「オランダのクラブ経営と 選手育成」開催

Jリーグは10月27日(大阪)と29日(東京)にマネジメントセミナーを開催した。講師はロブ・バーン氏。2日間で10クラブから計19名が参加した。

Jリーグ育成指導者セミナー 「オランダの選手育成」開催

Jリーグ・アカデミーは10月27日(大阪)と28日(東京)に育成指導者を主な対象としたセミナーを開催した。講師はロブ・バーン氏。2日間で22クラブから計61名が参加した。



©J.LEAGUE PHOTOS

フィジカルコンディショニング セミナー開催

Jリーグは11月1日、日本スポーツコンディショニング学院でフィジカルコンディショニングセミナーを開催した。講師は徳島大学教授の荒木秀夫氏。Jリーグが同セミナーを開催するのは初めてで、フィジカルコーチを中心に25クラブから41名が参加した。

Jリーグ 広報研修会開催

Jリーグは10月4、5日、クラブ広報担当者を対象に広報研修会を開催した。「広報担当者のメディアトレーニング」をテーマに、クラブの魅力やPRする効果的な話し方や非常時における危機管理対応、実際の記者会見形式でのトレーニングなど、実践を中心に研修を行った。各Jクラブから約50名が参加した。

「FLAGS TOWN 2005年 春夏新商品展示受注会」開催

株式会社Jリーグエンタープライズ(清水泰男代表取締役社長)、Jリーグフォト株式会社(同)は10月27、28日、東京都千代田区で「FLAGS TOWN 2005年春夏新商品展示受注会」を開催した。

今回は、特に素材面、機能面を重視したアパレル類や応援雑貨類、Jリーグフォトのトレーディングカード、ポスターなどが展示された。注目商品は、速乾、吸湿の機能素材で作られた背番号入りコンフィットシャツ(Jリーグエンタープライズ)、2005年度Jリーグオフィシャルカレンダー、Jクラブカレンダー(Jリーグフォト)などで、2日間で約400人が来場した。

新潟県中越地震による 代替試合開催 および義援金送付

Jリーグ、各Jクラブは新潟県中越地震を受けて、義援金を送るとともに新潟で開催の試合の延期や中止を決めた。

- 10月30日(土)のJ1 2ndステージ「新潟-柏」戦は11月10日(水)、国立霞ヶ丘競技場で代替開催された。
- 延期となった10月31日(日)のサテライトリーグ「新潟-大宮」戦(五十公野)は中止に決定。Jユースカップ2004からアルビレックス新潟が途中辞退した。
- 10月30日(土)と31日(日)に開催されたJ1、J2全試合では半旗掲揚、試合開始前の黙とう、全選手による喪章着用を実施した。
- Jリーグは、新潟県災害対策本部を通じ、義援金1000万円を送った。
- Jリーグは11月3日(水・祝)、2004Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝戦(国立霞ヶ丘競技場)会場で募金活動を行い、新潟県災害対策本部を通じて、集まった義援金276万2387円を送った。

Jリーグ担当審判員 岡田正義氏 J1主審通算200試合達成

10月23日、2004Jリーグ ディビジョン1 2ndステージ第10節、ヴィッセル神戸 vs サンフレッチェ広島(広島)の試合において、Jリーグ担当審判員、岡田正義氏のJ1リーグ戦主審担当試合数がJリーグ初の記録となる通算200試合となった。



©J.LEAGUE PHOTOS

【岡田 正義 Masayoshi OKADA】

- 生年月日: 1958年5月24日
- 出生地: 東京都
- 1級登録: 1986年11月
- J1リーグ戦 主審初担当試合:
'93サントリーシリーズ第2節(1993/5/19)
横浜マリノス vs ガンバ大阪(三ツ沢)
- J1リーグ戦通算 主審100試合達成:
1999Jリーグディビジョン1 1stステージ第12節(1999/5/8) 柏レイソル vs ヴィッセル神戸(柏)
- 表彰・優秀主審賞 受賞 2回(1997年、2002年)
- 2002年~Jリーグスペシャルレフェリー(SR)
- Jリーグ担当審判員 主審担当試合数
(100試合以上) (11月3日現在)

審判名	J1主審	J1副審
岡田 正義	201	5
モットラム	147	0
太田 潔	138	4
梅本 博之	129	2
上川 徹	122	17
布瀬 直次	115	27
砂川 恵一	114	27
片山 義継	106	12



©J.LEAGUE PHOTOS

「オランダのクラブ経営と選手育成」 ロブ・バーン氏によるゼネラルマネジャー講座から

10月26日、アルジャジーラ・スポーツ&カルチャー・クラブ(アラブ首長国連邦)のテクニカルディレクター、ロブ・バーン氏を講師に迎えてゼネラルマネジャー講座が開催された。40年近くに及ぶ指導者としての経験を基に「オランダのクラブ経営と選手育成」と題した講義を紹介する。

クラブ文化とフィロソフィー

各クラブは、それぞれ独自の文化を持つ。クラブ文化は国民性、地域性(港町、都市部など)、サポーター気質(裕福層、労働者階級など)をベースにして、歴史を積み重ねながら形づくられていく。こういったクラブ文化を尊重しながら、クラブ経営陣はクラブのフィロソフィー(バーン氏のニュアンスは「理念」という概念に近い)を確立しなければならない。なぜなら、ピッチの内のチームづくり、ピッチ外の組織づくり等はすべてクラブ・フィロソフィーのもとで行われるからである。

フィロソフィーは選手のスカウティング活動にも大きな影響を及ぼす。PSVアイントホーフェン(オランダ)のコーチをしていたころのこと。ストライカーを補強するためファンホーイドンク(Van Hooydonk: 現オランダ代表)の獲得に乗り出したが、最終的に会長の承認を得ることができなかった。アイントホーフェンは礼儀正しい紳士のクラブであり、同選手はクラブのフィロソフィーに合わない、というのがその理由であった。

ピッチ内外でのチームづくり

クラブが成功するためには、ピッチ内外でのチームづくりは重要である。そのためには、明瞭かつ現実的な目標を設定する必要がある。例えば、1部リーグに昇格したばかりのクラブが優勝を目標に掲げたとしても、それは実現可能な目標であろうか。目標を失えば、やがて組織は機能しなくなってしまう。チームワークも非常に重要である。どんなに優れたストライカーでも、チームメートの協力がなければ得点をあげることはできない。ひとりではできないことは限られるのである。

チーム編成とスカウティング活動

サッカー部門の全責任を負うのがテクニカル

ディレクター(TD)である。チーム力を分析して、補強すべきポジションを見極めるのは監督の役割であるが、実際に選手を獲得するのはTDの役割である。目の前の試合に勝たなければならない監督はどうしても短期的視野に立ってしまう。監督は補強すべきポジションと必要とされる選手のタイプをTDに伝え、長期的視野をもってチーム編成に取り組むことができるTDが、実際の選手獲得を行うのである。

自クラブの育成システムから引き上げるのが最も効率的であるが、必ずしも必要とされるタイプの選手がいるわけではない。そういった場合に対応するのがスカウティング部門である。もちろん、漠然とスカウティング活動を行っている意味がない。スカウティング計画を策定するのもTDの役割である。ヨーロッパの多くのクラブでは、スカウトに自クラブの元選手を起用している。彼らは自クラブの文化やフィロソフィーを理解しているからである。

選手育成は投資事業

選手育成はプロサッカークラブ成功の鍵を握る投資事業である。トップチームへ継続的に選手を供給する育成システムが確立されれば、トップチームのパフォーマンスとクラブ経営に安定感をもたらされる。したがって、クラブ経営者には、選手育成部門の予算をしっかりと確保し、クラブの

PROFILE

1943年4月1日生まれ。スパルタ・ロッテルダム(Sparta Rotterdam)で指導者としてのキャリアをスタートし、その指導歴にはアヤックス(Ajax Amsterdam)やPSVアイントホーフェン(PSV Eindhoven)といったオランダのトップチームや代表チームが含まれる。オランダ協会のインストラクターの経験もある。フェイエノールト(Feyenoord Rotterdam)のテクニカル・ディレクター在職時に小野伸二を獲得した。現在、アラブ首長国連邦のアルジャジーラ・スポーツ&カルチャー・クラブ(Al Jazira Sports & Culture Club)にてテクニカルディレクターを務める。

フィロソフィーののって選手育成計画を立てることが求められる。

育成指導者の待遇等にも気を配らなければならない。それなりの待遇には、それなりの指導者しか得られないものである。さらに、選手育成で重要なのは忍耐である。選手育成は回収までに時間を要する投資事業であることを忘れてはならない。

育成指導者に求められる資質

育成年代ではチームの勝利よりも個々の成長が優先される。よって、育成指導者は、選手の年齢に応じた指導ができる専門家でなければならない。勝つことは重要ではない、と言っているのではない。指導者は勝つために指導を行うものである。勝利は重要であるが、選手の能力を最大限に開発することが最終目的なのである。

年代によってトレーニング方法は異なるが、年代別のチームが個別に育成活動しているのはクラブとしての成功は得られない。トップチームを含め、すべての年代別チーム間で緊密なコミュニケーションを図り、一貫したフィロソフィーと育成計画のもとで活動することは極めて重要である。選手に求められるのと同様、指導者間のチームワークも重要である。

選手はそれぞれ異なる個性を持っている。育成指導者はこのことをしっかりと認識して、選手の長所を伸ばすよう心がけるべきである。欠点の修正に全力を注ぎ、あれこれ細かく指導するのではなく、選手自身に気付かせるようにすべきである。さもなければ、創造性に欠ける、ロボットのような選手ばかりになってしまうであろう。かつて、子供たちは、ストリートサッカー等の遊びの中でサッカーに必要な技術を自然に身に付けていた。そのような環境をつくり出すことが、育成指導者には求められるのである。

写真提供: © J.LEAGUE PHOTOS

